翻訳

細雨　驢に騎りて　剣門に入る

陸游の「剣門の道中　微雨に遇う」詩について

趙　斉平　著
三野　豊浩　訳

〔解題〕

○　本稿は、趙斉平氏の論文「細雨騎驢入剣門――説陸游『剣門道中遇微雨』」の翻訳である。同論文は、『宋詩臆説』（一九九三年十一月、北京大学出版社）に収録されている。

○　本文中に引用された陸游の詩について、銭仲聯氏の『剣南詩稿校注』（一九八五年九月、上海古籍出版社。以下『校注』と略記）により、その冊数・頁数・制作時期及び制作場所を、訳者補注として付記した。

○　本文中に引用された詩文の表記について、引用の誤りと考えられる場合には、原典により適宜修正した。誤りかどうか判断できない場合には趙氏の原文の表記に従い、異同の所在を補注に記した。

○　表記は、新字体・新仮名遣いとした。

陸游（一一二五～一二一〇）は、中原〔北方の黄河流域〕を奪回することを終生自己の任務とし、その愛国の思いは極めて強烈であった。彼は単に愛国の抱負を有するのみならず、何とかして実際の金との戦いに貢献しようとつとめもした。

投筆書生古来有　　筆を投ずるの書生　古来　有り
従軍楽事世間無　　軍に従うの楽事　世間に無し

（『剣南詩稿』〔以下『詩稿』と略記〕巻十七「独酌して南鄭を懐う有り」）(1)

それゆえ梁啓超は、陸游を次のように称賛している。

集中十九従軍楽　　集〔詩集〕中　十に九は従軍の楽

亘古男児一放翁　　亘古〔永遠〕の男児　一放翁〔陸游の号〕
（「放翁の集を読む」其一）

しかしながら、同時代のその他の詩人たちは、「たんに国事に対する憂憤もしくは希望を表現しただけであり、我が身を災難の中に投じ、生命と持てる力のすべてを国家に捧げたい、という壮志や大望を有してはいない」（銭鍾書『宋詩選注』）とし、陸游に至ってはじめて、「たんに愛国、憂国の思いを記したのみならず、救国、護国の度量と決意をも表明している」（同前）と見なすのは、これまた一面的に過ぎるだろう。なぜなら、呂本中はすでに次のように詠っているし、

欲逐范仔輩　　欲す　范仔〔北宋滅亡の際の義勇軍のリーダー〕の輩を逐い
同盟起義師　　同盟して義師〔義勇軍〕を起こさんと
（『東萊先生外集』巻三「兵乱の後　自ら嬉ぶ雑詩」其一）

また劉子翬も、次のように詠っているからである。

結束擬従戎　　結束〔装い〕従戎〔従軍〕に擬し
秋堂試宝弓　　秋堂〔秋の気配につつまれた座敷〕宝弓を試す
……　　……

挽強吾有待　　強きを挽くは　吾に待つ有り
狐兎莫争雄　　狐兎　雄を争う莫れ
（『屏山集』巻十六「弓を試す」）

何如著鞭走大梁　　何如ぞ　著鞭〔出陣〕して大梁〔河南省開封。北宋の都〕に走るは
我亦与爾同翺翔　　我も亦た爾と同に翺翔〔鳥のように高く飛ぶ〕せん
今年猟叛酟彭越　　今年　叛〔反逆者〕を猟して　彭越〔漢の高祖の家臣〕を酟とし
明年猟胡羆徳光　　明年　胡〔異民族〕を猟して　徳光〔遼の太宗の名〕を羆〔ほし肉〕とせん
（『屏山集』巻十二「劉兼道の猟」）

陸游と同時代のその他の詩人たちとの違いは、彼が四川・陝西にある宋・金国境防衛の前線にまで行き、そこで実際の金との戦いに参加する機会を有したことにこそある。彼は後に、当時を回想して次のように詠っている。

昔者戍南鄭　　昔者　南鄭〔陝西省〕を戍り
秦山鬱蒼蒼　　秦山　鬱として蒼蒼たり
鉄衣臥枕戈　　鉄衣〔鉄のよろい〕臥しては戈を枕とし
睡覚身満霜　　睡りより覚むれば　身　霜に満つ

（『詩稿』巻十一「鵝湖夜坐書懐」[2]）

孝宗の乾道八年（一一七〇）夏、陸游は山陰〔浙江省紹興〕を出発して蜀へ赴任し、年末に夔州〔四川省奉節〕に到着して通判の任に就いた。途中「梁参政に投ず」[3]詩（『詩稿』巻二）を書き、従軍して敵を倒したいという願いを述べている。

頗聞匈奴乱　頗る聞く　匈奴〔北方の異民族〕　乱るると
天意殄蛇豕　天意　蛇豕〔貪欲で凶暴な敵〕を殄くさんとす
何時嫖姚師　何れの時か　嫖姚〔漢の霍去病〕の師〔軍隊〕
大刷渭橋恥　大いに渭橋の恥を刷わん
士各奮所長　士　各おの　長ずる所を奮う
儒生未宜鄙　儒生　未だ宜しく鄙〔卑賤〕なるべからず
覆氈草軍書　氈〔毛氈〕を覆いて　軍書を草し
不畏寒堕指　畏れず　寒　指を堕とすを

ちょうどうまい具合に、四川宣撫使の王炎が、彼を幕府に招いてくれた。そこで、陸游は乾道八年（一一七二）の春の終わりに南鄭（興元府の行政の中心）に到着し、宣撫司干辦公事兼検法官に任命された。彼は王炎の幕府で、さまざまな軍事活動に参加した。たとえば、次のように。

登城看烽火　城に登りて　烽火を看れば
川迴風裂面　川　迴かにして　風　面を裂く

（『詩稿』巻八「夜　唐の諸人の詩を読むに、烽火を賦する者多し。因りて山南に在りし時、城に登りて塞上の伝烽を観しことを記い、追いて一首を賦す」[4]）

夜棲高塚占星象　夜は高塚〔小高い丘〕に棲みて　星象を占い
昼上巣車望虜塵　昼は巣車〔見張り用の軍車〕に上りて虜塵を望む

（『詩稿』巻三十六「昔を憶う」[5]）

また、軍中での豪放な生活を過ごしていた。たとえば、次のように。

打毬築場一千歩　毬を打ちて　場を築くこと　一千歩
閲馬列厩三万匹　馬を閲して　厩を列すること　三万匹
華灯縦博声満楼　華灯　博〔ばくち〕を縦にし　声楼に満つ
宝釵艶舞光照席　宝釵　艶舞　光　席を照らす

（『詩稿』巻二十五「九月一日夜、詩稿を読みて感有り、筆を走らせて歌を作る」[6]）

雪中痛飲百榼空　雪中に痛飲して　百榼〔たくさんの酒樽〕空しく
蹴踏山林伐狐兔　山林を蹴踏して　狐兔を伐つ

（『詩稿』巻十四「十月二十六日夜、夢に南鄭の道中を行く。既に覚めて恍然たり。筆を攬りて此の詩を作る。時に且に五更ならんとす」[7]）

さらに重要なことには、王炎のために計略を立てて軍事行動を画策しもした。しかし残念ながら、

画策雖工不見用　画策　工なりと雖も用いられず
悲咤那復従軍楽　悲咤〔嘆き悲しむ〕す　那ぞ従軍の楽しみを復せん

（『詩稿』巻三十八「三山に門を杜して歌を作る」[8]其三）

ということになり、しかも早早と、「四十（陸游は当時四十八歳）戎に従い　南鄭に駐す」（『詩稿』巻二十五「九月一日夜、詩稿を読みて感有り……」）という、短い従軍生活に終止符を打つことになった。乾道八年（一一七二）九月、虞允文が再び地方に派遣されて四川宣撫使となり、王炎は朝廷に帰還する。陸游はある時公用で閬中〔四川省〕に出向き、十月になってから南鄭に帰還したところ、王炎の幕府はすでに解散していた。陸游は四川・陝西の国境防衛の前線から呼び戻され、成都府路安撫使司参議官に任命された。十一月二日、陸游は南鄭を出発し、成都〔四川省〕へと赴任する。

陸游は、失意と悲愴な思いを胸に、南鄭を離れたのであった。彼は国境防衛の前線に身を置いていたとはいえ、北伐して金と戦うことについては何の実績もなく、

良時恐作他年恨　良時　恐らくは他年の恨みと作らん
大散関頭又一秋　大散関〔関中西部から秦に入る境界の要衝〕頭　又た一秋

（『詩稿』巻三「帰りて漢中の境上に次る」[9]）

今では成都に呼び戻され、遠く前線を離れてしまい、なおさらどうすることもできなくなってしまった。

那用更為麟閣夢　那ぞ用いん　更に麟閣〔漢代に功臣の像を掲げた楼閣〕の夢を為すを
従今正有鹿門期　今よりは正に鹿門〔湖北省にある隠者ゆかりの山〕の期のみ有り

（『詩稿』巻三「思帰引」[10]）

まさにこのような心境で剣門関を経過した時に、陸游は次にあげる「剣門の道中　微雨に遇う」[11]詩（『詩稿』巻三）を書いたのである。

衣上征塵雜酒痕
遠遊無処不消魂
此身合是詩人未
細雨騎驢入劍門

衣上の征塵　酒痕を雑え
遠遊　処として消魂せざるは無し
此の身　合に是れ詩人たるべきや未や
細雨　驢に騎りて　剣門に入る

この詩の実際の含意は、陸游が成都に到着して四年めに書いた「夏夜大酔し、醒めて後に感有り」[12]詩（『詩稿』巻七）の中に、最もはっきりと表現されている。

客遊山南夜望気　山南に客遊して　夜　気を望み
頗謂王師当入秦　頗る謂う　王師〔王者の軍隊〕当に秦に入るべしと
欲傾天上河漢水　天上の河漢〔天の川〕の水を傾け
浄洗関中胡虜塵　関中の胡虜〔異民族〕の塵を浄洗せんと欲す
那知一旦事大謬　那ぞ知らん　一旦　事　大いに謬り
騎驢劍閣霜毛新　驢に騎りて　剣閣に　霜毛　新たなるを
却将覆氈草檄手　却って氈〔毛氈〕を覆い檄を草せし手を将て
小詩点綴西州春　小詩に西州〔西方の地〕の春を点綴〔ぽつぽつと書きつづる〕す

このことは、陸游は本来金と戦う戦士になりたかったのだが、南宋の朝廷が金に対して妥協的で弱腰なために戦士となれず、やむなく詩人となったのだ、ということを物語っている。朱熹は、ある時次のように語ったことがある。

放翁之詩、読之爽然、近代唯見此人為有詩人風致。……近報又已去国、不知所坐何事、恐只是不合作此好詩、罰令不得作好官也。

陸游の詩は、読むと気分爽快になります。近頃の人たちの中では、ただこの人だけが詩人としての風格を備えています。……近ごろ、またもや都を立ち去ったとのことですが、一体何の罪を犯したのか知りません。恐らくは、こんな立派な詩を作るのはけしからぬというので、罰として立派なお役人になれなくなっただけのことでしょう。

（『朱子大全集』巻四十三「「徐載叔賡に答う」）

朱熹の言葉は、当時の愛国者たちが金への抵抗を要求しても願い通りにならないという不平と憤懣を反映し、陸游の代わりに不満を漏らしており、陸游は実際には政治上の圧迫・排斥を受け、やむなく詩人となったのだ、と言っているのである。このことは、我々が陸游の「剣門の道中　微雨に遇う」詩の主題を理解するのを助けてくれる。

陸游は風塵の中を山陰から夔州に向かい、さらに風塵の中を

夔州から南鄭に駆けつけ、瞬く間に今度は風塵の中を南鄭から成都に呼び戻された。それゆえ、成都に到着した四年目に、やはり「征塵〔旅のほこり〕十載〔十年〕戎衣〔軍服〕を暗くす」（『詩稿』巻八「歳暮の感懐」[13]）という嘆きをもらしている。「剣門の道中　微雨に遇う」詩は、冒頭からただちに「衣上の征塵」と詠いはじめ、それによって旅の途中での塵労を表している。「塵」の字のみについて言えば、また「万里　封侯を覓め」たものの、「塵は旧き貂裘〔テンの皮衣〕を暗くす」（『渭南文集』巻五十「訴衷情」詞）というように、功業を樹立したくてもそのすべがないという意味が、暗に込められている。実際、「征塵」は「いたずらに山河を跋渉した」という意味を明示しているのである。このように煩悶し、憂鬱なので、酒の力を借りて愁いをまぎらさずにはおられず、それゆえ「衣上」は「征塵」以外に「酒痕を雑え」てもいるのである。「酒痕」が上着についていることは、ちょっと軽く一杯飲んだのではなく、浴びるほど痛飲したことを物語っている。詩人は自分自身の姿を描写するにあたり、ただ上着にぽつぽつとこびり付いた土ぼこりと、ぽたぽたとしたたり落ちた酒のしみを用いるだけで、その失意で無聊な境遇と、言い表せないほどの悲憤でいっぱいの胸中とを表現しているのである。

同様に風塵の中をとぼとぼと旅してはいるが、南鄭に赴任するのと成都に赴任するのとでは、感じ方は大きく異なっている。夔州を離れての最初に書かれた「三折鋪に飯す　鋪は乱山の中に在り」[14]詩（『詩稿』巻三）は、次のように詠っている。

但令身健能強飯　但だ身をして健にして能く強飯せしむれば
万里只作遊山看　万里も只だ遊山と作して看ん

また、その後で書かれた「嘉川鋪にて小雨に遇い、景物　尤も奇なり」[15]詩（『詩稿』巻三）は、次のように詠っている。

一春客路怨風埃　一春　客路　風埃を怨むも
小雨山行亦楽哉　小雨に山行するは　亦た楽しからずや

「遊山」「山行」は、いずれも字面通りの意味であり、「万里」の行程の苦労を感じないどころか、まるで物見遊山のような尽きせぬ楽しみがある、というのである。これは、南鄭への赴任はみずから願い出てのことであり、心は希望に満ちているからである。ところが、南鄭を離れて最初に書かれた「初めて興元を離る」[16]詩（『詩稿』巻三）は次のように詠っており、

炊菰斫膾明年事　菰を炊き　膾を斫るは　明年の事ならん
却憶斯遊亦壮哉　却って憶う　斯の遊　亦た壮なるかな

その後、「長木晩興」[17]詩（『詩稿』巻三）でも、「聊か行役を将て登臨に当つ」と詠っている。「壮」遊、「登臨」はいずれも反語的表現であり、あわただしい「行役」を、かりそめに一回また一回という山水登臨の「壮」遊と見なしているのであり、明らかに、風雨に身をさらし、耐え難いまでに困窮していながら、その中に楽しみがあると、ことさらに強がりを言っているのである。これは、成都への赴任はやむを得ないことであり、意気消沈しているからである。「剣門の道中　微雨に遇う」詩の「遠遊　処として消魂せざるは無し」という一句もまたこのような意味であり、苦悩していながら、それをことさら楽しげに語っているのである。「遠遊」は、上の句の「衣上の征塵」を承けている。「遠遊」して「処として消魂せざるは無し」というのが反語的表現である理由は、「酒痕を雑え」によって読者に暗示されている。游国恩氏の『陸游詩選』（一九五七年三月、人民文学出版社）は、「消魂」を「あこがれさせる・慕わせる、の意」と解釈しており、字面の上からは正確に見ている。ところが、『陸游詩詞賞析集』（一九九〇年六月、巴蜀書社）はこれに反駁し、陸游の「思帰引」詩の「此の身　阿堵〔金銭〕の役に堪えず」と「仕宦〔役人づとめ〕　真に当に鶏肋〔未練の対象〕を棄つべし」の二句を根拠として、「陸游が『遠遊　処として消魂せざるは無し』である原因を、はっきり物語っている」と解釈している。「消魂」の含義を直接説明してはいないものの、「苦痛に耐えられない」という意味に解釈していることは明らかである。だが、このように解釈したのでは、下の「剣門に入る」とうまくつながらなくなる。「消魂」の語は江淹の「別れの賦」〔『文選』巻十六〕に由来し、まるで魂が飛び去ったような気持ちであることによって別れの無念の深さを形容し、後には多く「消魂」によって心情の耐え難さが極限に達していることを表すようになる。もしもただ、まるで魂が飛び去ったような気持ちである、という意味と取るだけならば、喜びや愛のきわみも、「消魂」あるいは「断魂」と言うことができる。林逋の「山園の小梅」詩には、「粉蝶〔白いチョウ〕如し知らば　合に魂を断つべし」とあるが、この場合の「断魂」は、楽しいことこの上もなく、その中に耽溺することを形容するものである。[1]随所に「遠遊」すれば、その都度人をうっとりと陶酔させることができるのであり、そう解釈してはじめて、次に「剣門に入る」という「遠遊」の継続を導くことができるのである。陸游は晩年「遠遊」[18]詩（『詩稿』巻四十九）を作り、みずから、

老子平生喜遠遊　老子〔老人。作者の自称〕平生　遠遊を喜ぶ
流塵不惜闇貂裘　流塵　惜しまず　貂裘〔テンの皮衣〕を闇くするを
江亭吹笛三巴夜　江亭　笛を吹く　三巴〔巴・巴東・巴西〕の夜
関路騎驢二華秋　関路　驢に騎る　二華〔太華山・少華

と詠っている。「遠遊を喜ぶ」の「喜」の字は、「消魂」の注釈とすることができ、「三巴の夜」「二華の秋」は、四川・陝西の旅を概括している。「流塵　惜しまず　貂裘を闇くするを」から見て、「喜」もまた反語的表現であり、実際の内容は、やはり「聊か行役を将て登臨に当つ」なのである。

「登臨」について言えば、高い山に登ったり、川のほとりに臨んだりした際には必ず詩を作る、ということは、あたかも文人墨客の本業となったかのようである。屈原は、「遠遊」を書かなかっただろうか（王逸は、「遠遊」を屈原の作としている）。陸游も、自分のことを「二十年来　遠遊を賦す」（『詩稿』巻十一「北窓に詩を哦り、因りて賦す」其一）と詠っている。さまざまな場所における「登臨」や「遠遊」を詠うことで、すでに自分を詩人と結びつけており、それゆえ「遠遊　処として消魂せざるは無し」の後で「此の身　合に是れ詩人たるべきや未や」と自問し、「細雨　驢に騎りて　剣門に入る」で、それに肯定的に答えているのである。「剣門に入る」ことは「遠遊」の継続であるが、それは通常の「遠遊」ではない。「剣門に入る」は「蜀に入る」と言うに等しく、これはまた過去の多数の詩人の入蜀の故事と結びつけてもいるのである。王勃・陳子昂・高適・岑参・李白・白居易・李商隠・蘇軾・文同といった詩人たちは、ある者は蜀で生まれ、またある者は入蜀の経験があり、中でも杜甫と黄庭堅の入蜀後の詩は、より一層老成・円熟し、新しい境地に到達した。陸游は、自分が今まさに「剣門に入」ろうとしていることで、あたかもこれらの詩人たちの列に加わったかのように感じたのである。『陸游詩詞賞析集』は、剣門関が非常に険阻なことに注目し、「陸游は険しい山道をものともせず、果敢に『小雨の降る中をロバに乗って剣門に入った』のであり、このことは詩句に幾分洒脱な雰囲気を帯びさせている」と言っているが、これでは陸游の詩の本来の意図に完全にはずれてしまっている。「険しい山道をものともせず」、「遠遊」してしかも幾分「洒脱」であるというならば、どうしてまた「消魂」を「苦痛に堪えない」と解釈するのだろうか。陸游の詩句は明らかに、呼び戻しに対する極めて大きな不満を、自嘲の形式によって表現しているのであり、悲憤に満ち、痛切である。一体どこに「洒脱な雰囲気」があるというのだろうか。

ここにまた一つ、いかに「細雨　驢に騎り」を解釈するか、という問題が存在する。元来、「細雨　驢に騎り」は、「剣門に入る」と同様に、いずれも上の句の「合に是れ詩人たるべきや未や」という問題提起に向けられているのである。陸游が「剣門に入」った時に、天候は「細雨」であり、自分自身は「驢に騎」っていた。歴史上、詩人がロバに乗る故事も大変多い。〔陸游の時代から比較的〕近い北宋の時代にも、潘閬はロバにさかさまに乗って華山を見たし、王安石は童僕を従えロバに乗って鍾山に遊んだ。それらはいずれも、絵図に描かれている。し

かし陸游のここでの「騎驢」は、一つには濛濛と降る「細雨」の中でのことであり、二つには詩を作ることと密接に関連している。孫光憲の『北夢瑣言』巻七（また計有功の『唐詩紀事』巻六十五に引く『古今詩話』）は、次のような記事を載せている。

相国鄭綮善詩。……或曰、「相国近有新詩否」。対曰、「詩思在灞橋風雪中驢子上、此処何以得之」。

宰相の鄭綮は、詩を作るのが上手であった。……ある人が、「宰相様は近頃新しい詩ができましたか」とたずねたところ、鄭綮は、「詩興は、灞橋〔長安の東にある灞水にかかる橋〕の風雪の中、ロバの背中の上でこそ得られるのだ。こんな所でどうして得られるものか」と答えた。

陸游の詩の中で「驢に騎」ることを詠った箇所は枚挙にいとまがないが、詩を書くことと密接に関連しているものは、その多くが、鄭綮の故事を用いている。たとえば、次のようなものである。

老来万事渾非昔　老来　万事　渾て昔に非ず
唯有詩情似灞橋　唯だ詩情の灞橋に似たるのみ有り
（『詩稿』巻三十三「秋夜」[22]其一）

覓句灞橋風雪天　句を覓む　灞橋　風雪の天
灞橋風雪吟雖苦　灞橋の風雪　吟　苦なりと雖も
杜曲桑麻興本濃　杜曲〔長安の南にある名勝の地〕の桑麻　興　本より濃し
（『詩稿』巻三十八「耕し罷みて偶たま書す」[24]）

（『詩稿』巻三十五「作夢」[23]）

「風雪」は、必ずしも常にあるわけではない。ある時は「微雨」にあうのだが、境遇はまたほぼそれに近く、それゆえ「巴東にて小雨に遇う」[25]詩（『詩稿』巻二）の其一は、次のように詠っている。

暫借清渓伴釣翁　暫く清渓を借りて　釣翁に伴えば
沙辺微雨湿孤篷　沙辺の微雨　孤篷〔孤舟のとま〕を湿らす
従今詩在巴東県　今より　詩は巴東県に在り
不属灞橋風雪中　灞橋の風雪の中に属せず

このように、「細雨」が「騎驢」と同時にあることが、詩人が必ず備えるべき条件なのであって、ただ「驢に騎」ることだけを単独に見ることはできないのであり、それゆえ、その他のいろいろな詩人たちの「騎驢」の故事を列挙することは、もはや必要ではなくなってしまったのだ、ということがわかる。

「剣門に入る」ことは、陸游がかねてから李白・杜甫・蘇軾・黄庭堅といった詩人たちを敬慕していたことから考えて、詩人が必ず備えるべき条件として、古くからそのように言われていたと見てよいだろう。「細雨　驢に騎る」は鄭綮の言葉を用いているが、こちらの方は、詩人が必ず備えるべき条件と見るには、いささか疑問の余地がある。黄徹の『䂬溪詩話』巻二は、鄭綮の言葉を引用した後に、続けて次のように言う。

『北夢瑣言』載。綮雖有詩名、本無廊廟之望、及登庸、中外驚駭。太原兵至渭北、天子震恐、渴于攘却、綮請于文宣王謚号中加一「哲」字。其不究時病、率此類。愚謂此人、止可置之風雪中令作詩也。

『北夢瑣言』に、次のようにある。鄭綮は詩人として名があったとはいえ、もともと朝廷に立つ政治家としては嘱望されておらず、宰相に登用されるに及んで、朝廷の中も外も驚愕した。太原〔山西省〕の兵が渭水〔河南省洛陽の近くを流れる川〕の北まで攻めて来た時、天子は恐れおののき、これを撃退することを強く望んだが、鄭綮は、文宣王〔開元年間に贈られた孔子の謚号〕の謚号に「哲」の一字を追加することを願い出た。その時弊にうといことは、おおむねこの類であった。思うに、この人は、ただ風雪の中に置いて詩を作らせておくのがよろしかろう。

もし陸游もこのような見解を持っていたとすれば、次のように考えて構わない。すなわち、陸游は北伐して金と戦い、功業を打ち立てることができなかったために、山川や風月を吟詠する詩人となったのであり、その必然の結果として、鄭綮のように「時弊にうとく」、いたずらに「詩名」があると非難されることになった。しかし、鄭綮がみずからそのような境遇に甘んじているのに対し、陸游はやむなくそうなったのである。「剣門の道中　微雨に遇う」詩の創作背景と、作品自体が表出している思想感情とを結びつけるならば、完全に次のように推測できるだろう。すなわち、「合に是れ詩人たるべきや」という問いかけに対して、表面的には肯定しているが、実際には否定しているのだ、と。――見るがいい、「剣門に入」りさえすれば、それで詩人ということになるのだ。これは、何とも喜ぶべきことではないかね――。ところが、入蜀の途中、陸游は次のように詠っている。

剣門亦何好　剣門　亦た何の好きことかある
小憩聊爾爾　小憩して　聊か爾爾〔返事の言葉。その通り、その通り〕たり

（『詩稿』巻三「興元より官として成都に赴く」[26]）

それゆえ、「剣門の道中　微雨に遇う」は自嘲の詩である、と誰もが言うのだが、詩句の背後から、その実際の含義を看取

しなければならない。しかし、詩人が何を「自嘲」しているのかについては、やはり異なる解釈が存在する。

那知一旦事大謬　那ぞ知らん　一旦　事　大いに謬り
騎驢剣閣霜毛新　驢に騎りて　剣閣に　霜毛　新たなるを
却将覆氈草檄手　却って氈を覆い檄を草せし手を将て
小詩点綴西州春　小詩に西州の春を点綴す
（『詩稿』巻七「夏夜大酔し、醒めて後に感有り」）

この詩は、自嘲は「自悲（みずからを悲しむ）」であり、悲しみは、敵を倒し国に報いるすべがないことにあることを、はっきり物語っている。ところが陳衍は、自嘲は実は「自喜（みずからを喜ぶ）」であり、ついに詩人となれたことを喜んでいるのだ、と見なしている。

僕謂「細雨騎驢入剣門」博得詩人名号、亦太可憐、況尚未知其是否乎。積習累人至此。然此詩若自嘲、実自喜也。

思うに、「小雨の降る中をロバに乗って剣門に入った」ことによって詩人としての名声を博したとは、何とも気の毒なことである。ましてや、作者がその成否をいまだ知らないとあっては、なおさらのことである。積年の悪習が人をわずらわせることが、ここに至ろうとは。しかしながら、この詩は自嘲のようでいて、実は自分のために喜んでいるのである。

（『石遺室詩話』巻二十七）

これでは、陸游がこの詩を作った本来の意図と、完全に食い違ってしまっている。「ちょうど詩風の転換期のまっただ中にあり、陸游はまだ完全には、『我　昔　詩を学びて未だ得る有らず、残余　未だ人より乞うを免れず。力は孱く　気は餒えて　心に自ら知る、妄りに虚名を取りて　慚ずる色有り』という悩みから脱していなかった。それゆえ、『此の身　合に是れ詩人たるべきや未や』という問いかけがあるのである」（『陸游詩詞賞析集』）と言うに至っては、なおさら見当違いも甚だしい。

陸游は自嘲の形式により、敵を倒して国に報いる方法のないことをみずから悲しんでいるが、これは二重の意味を含んでいる。その一つは、

却将覆氈草檄手　却って氈を覆い檄を草せし手を将て
小詩点綴西州春　小詩に西州の春を点綴す
（『詩稿』巻七「夏夜大酔し、醒めて後に感有り」）

であり、もう一つは、

渭水岐山不出兵　渭水　岐山〔陝西省の山〕　出兵せず

却携琴剣錦官城　却って琴剣を錦官城〔成都の美称〕に携う

（『詩稿』巻三「即事」[27]）

である。前者は、金との戦いに参加する機会を失ったことを意味し、後者は、幸運にも南鄭での軍事的活動に参加することはできたが、金に対抗するための策略を建議しても採用されなかった、ということを意味している。陸游が南鄭で書いた「山南行」[28]詩（『詩稿』巻三）は、次のように詠っている。

国家四紀失中原　国家　四紀〔四十八年間〕　中原を失い
師出江淮未易呑　師〔軍隊〕　江淮〔江蘇・安徽の一帯〕より出だすも　未だ呑み易からず
会看金鼓従天下　会ず金鼓〔銅鑼と太鼓〕の天より下るを看んとすれば
却用関中作本根　却って関中〔函谷関以西の地〕を用て本根〔根拠地〕と作せ

辛棄疾は山東で挙兵し、山東・河北の形勢を熟知した上で、次のように主張した。

河北可以裂天下、山東可以趨河北、両淮可以窺山東。

河北は天下を二つに分断することができ、山東からは河北におもむくことができ、両淮からは山東をうかがうことができます。

（「九議」其五）

兵出沭陽、則山東可指日而定、山東已定、則河北可伝檄而下、河北已下、則燕山者某将使之塞南門而守。

沭陽〔江蘇省〕から出兵すれば、山東は期日を定めて平定でき、山東がすでに平定されれば、河北は檄文を伝えるだけで降伏させることができ、河北がすでに降伏すれば、燕山〔北京。金の都〕は、私がこれを南門〔宮殿の南の正門〕をふさいで防御せざるを得ないようにしてみせましょう〔敵の都まで攻め上ってみせましょう〕。

（「九議」其六）

陸游は四川・陝西の国境防衛の前線に駐在し、南鄭の一帯で実地の考察を行い、関中の有利な条件を看取し、金に対する北伐を行うには、まず長安〔陝西省西安〕を奪取し、関中を拠点として、そこから中原を平定すべきであると主張した。『宋史』「陸游伝」によれば、陸游は王炎のために次のように「進取の策を陳べ」たという。

以為経略中原、必自長安始。取長安、必自隴右始。当積

粟練兵、有釁則攻、無則守。

思うに、中原を攻略するには、必ず長安から始めるべきです。長安を攻め取るには、必ず隴右〔甘粛省〕から始めるべきです。食糧を蓄えて兵士を訓練し、敵にすきがあれば攻め、なければ守るのです。

しかし、王炎はこれを採用できなかった。それゆえ陸游は、

画策雖工不見用　画策　工なりと雖も用いられず
悲呟那復従軍楽　悲呟す　那ぞ従軍の楽しみを復せん

（『詩稿』巻三十八「三山に門を杜して歌を作る」其三）

と慨嘆したのであった。彼自身も、前線からすみやかに呼び戻された。彼は命令を受けた時に、沈痛な思いを込めて、次のように詠っている。

渭水函関元不遠　渭水　函関〔函谷関〕　元より遠からざるに
著鞭無日涕空横　著鞭〔出兵〕するに　日　無く　涕　空しく横たわる

（『詩稿』巻三「嘉川鋪にて檄を得、遂に行き、中夜　小柏に次る」[29]）

成都に到着した後、范成大〔陸游の友人〕が朝廷に帰還するのを見送った時にも、陸游は次のように詠っている。

公帰上前勉画策　公〔范成大をさす〕　上〔皇帝〕の前に帰らば　画策に勉めよ
先取関中次河北　先に関中を取り　次には河北

（『詩稿』巻八「范舎人の朝に還るを送る」[30]）

それゆえ、陸游の悲しみは、ただ単に南鄭を離れ、やむなく詩人となったことによるのみならず、またその計画がいっこうに実現されず、南鄭の一帯が、

索虜尚憑三輔険　索虜〔辮髪の異民族〕　尚お憑る　三輔〔都の付近の地〕の険
散関未下九天兵　散関〔大散関〕　未だ下さず　九天の兵

（『詩稿』巻七「睡りより起く」[31]）

という具合であったことにもよるのである。

陸游の七言絶句の芸術的成就は、彼の七言律詩には及ばないが、おのずとその特色があり、おしなべて流麗自然に書かれている。陳衍は、

剣南七絶、宋人中最占上峰。此首又其最上峰者、直摩唐賢之壘。

陸游の七言絶句は、宋人の中で最高峰を占めている。この一首（「剣門の道中　微雨に遇う」詩）は、さらにその中における最高峰であり、ただちに唐の賢人たちの名作に迫るものである。

（『石遺室詩話』巻二十七）

とすら述べている。実際には、陸游の七言絶句は決して「宋人の中で最高峰を占める」ものではなく、たとえば北宋の王安石や南宋の楊万里の七言絶句などは、いずれも陸游の七言絶句に劣るものではない。しかも、「剣門の道中　微雨に遇う」詩もまた陸游の七言絶句中の「最高峰」ではなく、陸游の晩年の少なからぬ七言絶句は、芸術的により一層円熟したものとなっている。当然、陸游のすべての詩作が「草率」の欠点を有することを免れないのと同様に、彼のある種の七言絶句もまた、楊万里のある種の七言絶句のように軽佻浮薄に流れるきらいがあり、趙翼の『甌北詩話』巻六は、すでにこの点を指摘している。[32]しかし「剣門の道中　微雨に遇う」詩には決してそのような欠点はなく、その深遠な思想的内容と独特な芸術的表現とによって、長期にわたり人口に膾炙しているのである。

一つの事を付記しておく。[33]一九二七年に蔣介石が革命に反旗を翻した後、中国共産主義運動の先駆者の一人である何叔衡は、党の決定により、一九二八年に東北を経由してモスクワへと学習に赴いた。出発の前に、何叔衡は陸游の「剣門の道中　微雨に遇う」詩を下敷きに、一首の絶句を作って抱負を述べた。

身上征衣雑酒痕　遠遊無処不消魂
此生合是忘家客　風雨登輪去国門

身上の征衣　酒痕を雑え
遠遊　処として消魂せざるは無し
此の生　合に是れ　忘家の客なるべし
風雨　輪〔汽船〕に登りて　国門を去る

（『革命烈士詩抄』〔一九五九年三月、中国青年出版社〕）

このことからも、陸游のこの詩の深遠な影響の一端をうかがい知ることができる。

〔著者原注〕

① 陸游の「杭頭晩興」[34]詩の其一（『詩稿』巻十三）は、次のように詠う。

山色蒼寒野色昏　山色　蒼寒　野色　昏し
下程初閉駅亭門　下程〔休憩〕初めて閉ざす　駅亭〔宿場駅〕の門
不須更把澆愁酒　須いず　更に愁いを澆ぐの酒を把るを
行尽天涯慣断魂　天涯を行き尽くして　魂を断つに慣れたり

ここでの「断魂」は、「苦痛に堪えない」の意と解釈すべきである。なぜなら、「遠行の苦痛に慣れているので、酒を借りて憂さ晴らしをする必要がない」と詠っているからである。

②陸游もまた、自分がロバに乗っている姿が絵図のようであろうと想像している。「自詠絶句」[35]（『詩稿』巻六十一）の其三は、次のように詠う。

小市騎驢寒日裏　　小市　驢に騎る　寒日の裏（うち）
任教人作画図看　　任教〔ままよ〕人をして画図を作（な）して看（み）しめん

〔訳者補注〕

(1)「独酌有懐南鄭」／『校注』第三冊一三一八頁。淳熙十二年秋、山陰で。
(2)「鵝湖夜坐書懐」／『校注』第二冊九一六頁。淳熙六年九月、鉛山で。
(3)「投梁参政」／『校注』第一冊一三五頁。乾道六年閏五月、臨安で。
(4)「夜読唐諸人詩多賦烽火者因記在山南時登城観塞上伝烽追賦一首」／『校注』第二冊六二七頁。淳熙四年正月、成都で。
(5)「憶昔」／『校注』第五冊二三五三頁。慶元四年春、山陰で。
(6)「九月一日夜読詩稿有感走筆作歌」／『校注』第四冊一八〇二頁。紹熙三年秋、山陰で。
(7)「十月二十六日夜夢行南鄭道中既覚恍然攬筆作此詩時且五更矣」／『校注』第三冊一〇九二頁。淳熙八年十月、山陰で。
(8)「三山杜門作歌」／『校注』第五冊二四五六頁。慶元四年冬、山陰で。原文は出典を『詩稿』巻三の「自興元赴官成都」詩とするが、『校注』により改める。
(9)「帰次漢中境上」／『校注』第一冊二五五頁。乾道八年十月、閬中から南鄭に帰還する途中で。
(10)「思帰引」／『校注』第一冊二六六頁。乾道八年十一月、益昌から剣門に向かう途中で。
(11)「剣門道中遇微雨」／『校注』第一冊二六九頁。乾道八年十一月、南鄭から成都に向かう途中、剣門関で。なおこの詩は、銭鍾書の『宋詩選注』にも採録されている。
(12)「夏夜大醉醒後有感」／『校注』第二冊五八二頁。淳熙三年四月、成都で。
(13)「歳暮感懐」／『校注』第二冊六二一頁。淳熙三年冬、成都で。
(14)「飯三折鋪鋪在乱山中」／『校注』第一冊二一一頁。乾道八年正月、夔州を離れた直後に。
(15)「嘉川鋪遇小雨景物尤奇」／『校注』第一冊二二八頁。乾道八年春、嘉州で。
(16)「初離興元」『詩稿』巻三／『校注』第一冊二五七頁。乾道八年十一月、南鄭を離れた直後に。
(17)「長木晩興」／『校注』第一冊二六一頁。乾道八年十一月、南鄭から成都に赴く途中で。
(18)「遠遊」／『校注』第六冊二九三四頁。嘉泰元年冬、山陰で。
(19)「北窓哦詩因賦」／『校注』第二冊九〇四頁。淳熙六年八月、建安で。『校注』は「年来」を「来年」とする。
(20)『宋詩紀事』巻五に潘閬の七言絶句「過華山」詩があり、その注に、「『図画見聞録』。長安許道寧嘗画『潘閬倒騎驢図』」とある。
(21)魏泰の『東軒筆録』巻十二に、「王荊公再罷政、以使相判金陵……平日乗一驢、従数僮、遊諸山寺」とある。また、『王荊公詩注』巻二十二所収の「自白門帰望定林有寄」詩の「蹇驢愁石路」という句の李壁注に、「公在閑、只騎驢往来北山」とある。「北山」は鍾山をさす。また『宣和画譜』巻七によれば、北宋の画家李公麟に「王安石定林蕭散図」があるという。定林は、鍾山にある寺院の名。
(22)「秋夜」／『校注』第四冊二一七六頁。慶元元年秋、山陰で。

(23) 「作夢」／『校注』第五冊二二八七頁。慶元二年冬、山陰で。
(24) 「耕罷偶書」／『校注』第五冊二四五一頁。慶元四年冬、山陰で。
(25) 「巴東遇小雨」／『校注』第一冊一七一頁。乾道六年十月、入蜀の途中、巴東県で。
(26) 「自興元赴官成都」／『校注』第一冊二五八頁。乾道八年十一月、南鄭を離れた直後に。『校注』は「劍門」を「劍南」とする。
(27) 「即事」／『校注』第一冊二七五頁。乾道八年十一月、綿州の旅の途中で。
(28) 「山南行」／『校注』第一冊二三二頁。乾道八年三月、南鄭で。この詩も、『宋詩選注』に採録されている。
(29) 「嘉川鋪得檄遂行中夜次小柏」／『校注』第一冊二五四頁。乾道八年十月、閬中から南鄭に帰還する途中に。
(30) 「送范舍人還朝」／『校注』第二冊六五一頁。淳熙四年六月、眉州の慈姥巖で。
(31) 「睡起」／『校注』第二冊五九四頁。淳熙三年五月、成都で。
(32) 『甌北詩話』巻六に、「或者以其平易近人、疑其少鍊」とある。しかし、これは趙翼自身の見解ではない。趙翼はこの後でこうした見解に反駁し、陸游の詩における鍛鍊と凝縮のあり方について論じている。
(33) 以下の部分はあるいは蛇足と思われるかも知れないが、趙氏の原文を尊重する意味で、そのまま訳出した。
(34) 「杭頭晩興」／『校注』第三冊一〇二六頁。淳熙七年十二月、蜀から東に帰る途中、寿昌で。
(35) 「自詠絶句」／『校注』第六冊三四九三頁。開禧元年春、山陰で。『校注』は「騎」を「跨」、「看」を「伝」とする。